

縄文海進から見る戸畑の姿

Influence by Jomon Marine Transgression on the use of land

児玉美琴 尾藤沙紀
(明治学園中学高等学校)

Abstract

In the areas which seem to be influenced by the ancient Jomon Marine Transgression, residential district spread. There are not many high buildings or important public facilities. On the other hand, in the districts where the marine transgression seems not to have happened, there are many high buildings and important facilities for our lives such as city office buildings. Through creating an ancient map of Tobata district in Kitakyusyu City, the research was conducted about whether or not there still remains some influence by Jomon Marine Transgression on the use of land.

Keywords : 縄文海進 / 海面上昇 / 土地活用 / 北九州市戸畑区 / 天籟寺川 / 製塩土器

はじめに

今から約 10,000 年前に地球が温暖化したことによって起こった海面上昇を縄文海進という。縄文海進の影響を受けた地域と受けていない地域での土地利用の仕方に差異があると考えられる。縄文海進の影響を受けていた土地は、かつて干潟のようになっていたと推測され、「現在に至るまで地盤が弱く、高い建物などが建っていないのではないか」と考えられた。その一方で、縄文海進の影響を受けていない土地は「地盤が強く、人々の生活に重要な役割を果たす建物や高い建物が建っているのではないか」との仮説が生じた。縄文時代の戸畑区の地図を再現し、現在の戸畑区の地図と重ね合わせてみることで、縄文海進の影響を受けた土地の特定を試みた。

1. 天籟寺川でのフィールドワーク

最初に天籟寺川周辺でのフィールドワークを行った。天籟寺川周辺は大雨が降ると水害が起こりやすい場所として知られているため、縄文時代においても氾濫しやすい河川であったのではないかと考えられた。この仮説が正しければ、流水の働きを受けた堆積物で形成された地層や化石など、この周辺がかつて海であった痕跡が発見できると考えられたが、川沿いは右の写真1のように護岸工事が行われており、手掛かりは発見されなかった。



写真1 天籟寺川周辺の様子

2. 北九州地誌を参考にした地図の作成

北九州地誌の中にある約 10,000 年前の戸畑の予想地図を現在の戸畑の地図と重ね合わせて地図を作成し、戸畑区で起こった縄文海進の概観を把握した。北九州地誌の中の約 10,000 年前の地図に 50m の等高線が存在していたため、それを基準として地図2を作成した。地図2の中にある細い黒の実線は、50m の等高線を表している。また、赤い実線が今から約 10,000 年前の戸畑の海岸線である。地図2より、約 10,000 年前の戸畑の海岸線は、現在の海岸線よりかなり内陸部に位置していたことが読み取れる。

3. 古代の遺跡を参考にした地図の作成

次に、戸畑区にある古代の遺跡に注目した。地図1上の黒い円は全て、戸畑区で発見された遺跡の位置を示したものである。特に、星印の遺跡は製塩土器が発掘された千防遺跡を表している。また、古代に遺跡があったと考えられる場所は、少なくとも当時海に沈んでいなかったと考えられる。これらの情報を参考にして、地図1を作成した。



地図1 古代の遺跡を参考にした地図

4. 地名を参考にした地図の作成

次に、地名を参考にした地図の作成を行った。天籟寺川周辺でのフィールドワークの際に発見した、「正津」という地名に注目した。正津の正は「正面」、津は「港」という意味を持っているため、「正津はかつて港だったと推測することができる」という説があり、戸畑区には他にも海に関する名前が付けられた場所があるのか調査した。調査の結果、海に関する漢字を含む地名が戸畑区には多く存在することが分かった。ここでは2つ例を挙げる。

1つ目は、先ほど挙げた「正津」である。命名されたのは昭和10年と最近だが、「かつて、天籟寺から菅原までの地域が広い入り江となっており、風よけのために船着き場が設置されていた。その正面にあったことから正津と命名された」という記述を見つけることができた。また、2つ目は「沖台」で、命名されたのは昭和14年～43年の間である。「天籟寺川付近はかつて入海であり、川からの土砂の堆積で台地状の洲ができたことから沖台と命名された」という記述があった。

これらの情報から作成したのが地図3である。この地図は、5mの等高線を海岸と見立てて作成した地図と類似している。地図3の黒い実線は5mの等高線を表しており、赤い実線が地名に



地図2 北九州地誌を基に作成した地図



地図3 地名を参考にした地図

基づいて作成した海岸線を表している。

地名という側面から地図を作成しようとした際、「地名は伝承に基づいてつけられることもあり、歴史的に正確ではない場合もある」という北九州市立いのちの旅博物館の宮元さんの意見も考慮した。伝承が残されている地名の例として「菅原」が挙げられる。この場所は、菅原道真が大宰府に左遷された折、船に乗って立ち寄った場所であることから「菅原」と命名されたと言われている。しかし、これが史実であるのか否かは定かではない。このように、信憑性に欠ける伝承は多数存在する。しかし、地名を参考にして作成した地図3が先行研究を参考にした地図2と同じようになったことから、地図2の信憑性は高いと考えられる。例えば、地図2と地図3を比較すると、同じような場所が入江になっており、更に海岸の大まかな形もよく似ていることが分

かる。

さらに、地図1を作成した際に用いた千防遺跡の情報からも考察を行った。前述したように、千防遺跡からは製塩土器という塩を作るための土器が多数出土しており、作業場として使われていたことが分かっている。写真2は製塩土器である。この土器に海水を汲み上げ、薪で火を焚いて水だけを蒸発させ、土器を割ることで土器の側面に付着した塩を取っていた。そのため、多くが写真2のように割れた状態で発掘される。現在正津町がある場所が入江になっていたとすると、千防遺跡は岬の突端に位置した遺跡であったと考えることができる。この立地は製塩に必要な海水、そして土器を熱するのに必要な薪などの木材を手に入れるのに最適である。入江になっていたのであれば、海が近く海水を得やすく、また、地図上で千防遺跡の下のほうには金比羅山という山があり、薪も手に入れやすかったと推測できる。

正津町のある場所が入江であったことは、地理的な特徴から見ても理に適っているといえる。



写真2 製塩土器

5. 結論

これらの地図から、縄文海進の影響の有無と土地利用の差異について土地ごとに比較した。

縄文海進の影響を受けた土地として考えられるのは、正津町をはじめとする天籟寺川周辺の土地である。一方、縄文海進の影響を受けていない土地として台地の上や金比羅山などが考えられる。

正津町をはじめとする天籟寺川周辺の土地には、写真3のように住宅街が広がっている。一戸建ての住宅が多く、建物の高さも最高で3階建てほどだった。

それに対し、そのすぐ近くにある台地の上には高層マンションや市役所などが立ち並んでいる。写真4がその様子である。

このことから、縄文海進の影響を受けた地は高い建物や重要な行政機関の建物を建てるには不向きな土地であると推測できる。現在建築基準法で、「高い建物は耐震性を考え、建設の際に強固な地盤がある地層まで建物の基礎を打ち込まなければならない」と定められている。そのことから考えると、縄文海進の影響を受けた土地に高い建物が見られなかった理由として、高い建物を支えるための強固な地盤が存在していない可能性が考えられる。これらのことから、縄文海進は、現在の土地の活用の仕方に対して大きな影響を与えていると考えられる。

最後に展望である。私たちはこれから2つのことを行いたいと考えている。1つめは、現在の戸畑と縄文時代に海進の影響を受けた土地の比較をより詳しく行い、縄文海進が土地に与えた影響をさらに調べることである。2つめは、将来起こる海面上昇に備えて、戸畑区で行うべき対策の基本計画を策定することである。将来起こりうるリスクとして、最も可能性の高いものが西南極氷床の融解であり、つづいてグリーンランド氷床の融解が挙げられる。西南極氷床が融けると、海水面は5m上昇し、グリーンランド氷床も融けると、さらに7m上昇すると言われている。こ



写真3 天籟寺川周辺の様子



写真4 台地の上の様子

これらの可能性や土地の活用の仕方を考慮しながら、基本計画を立てていきたい。

6. 引用文献・参考文献

- ・北九州市文化財調査報告書第 115 集
- ・福岡県史資料 続第 4 輯 地誌編
- ・角川日本地名大辞典
- ・戸畑市史

また、地図の作成にあたって、北九州市立いのちの旅博物館の宮元香織様にご協力を頂いた。